

教科教育法の授業における演習の方法と効果

家政教育・金子 省子

1. 授業科目の概要

家庭科教育法の授業科目構成は、2回生前期の家庭科教育法 I を教科教育の教員が担当した後、2回生後期に II を教科専門の教員が担当し、食物、被服、保育の3領域で構成している。金子担当の保育領域の履修時期は従来の教育法 IV の3回生後期から、前倒しになり、回数は7回・8回から5回へと減少している。本年度の受講生は2回生だけでなく3・4回生を含む（学校教育2回生8名、特別支援教育3回生1名、学校教育4回生2名、生活環境コース2回生13名、同3回生1名）。

2. 授業の目的・目標・内容構成

家庭科教育法 II の保育領域部分では、保育に関する学習の重要性と方法についての理解を深め、家庭科指導における実践的な力を養うことを目的としている。DP1（知識・理解）、DP3（技能・表現）に対応し、目標として、保育学習の重要性と今日的課題について述べることができ、保育領域の指導内容・方法・評価について考察し発表することを位置づけている。

本年度の内容構成は、第1回：家庭科保育学習の課題、第2回：体験的学習法の検討（ロールプレイング実習）、第3回から5回：グループごとの発表に基づく演習。

講義部分では、保育学習の課題に関する講義の後、確認テストで知識の定着をはかった。その後特に保育領域の方法上の課題の1つである体験的学習のなかから、個人学習は難しいロールプレイング実習を行った。

演習については、これまで個人発表の方法をとり、具体的には年度により次の2つの方法をとってきた（①教員が複数のテーマとこれに関する資料を提示し学生が希望をもとに選択して、個人発表を行う、②教員が複数のテーマを提示し、指導事例や授業研究に関する論文などを各自収集してこれに基づく発表を行う）。

本年度は、受講生数が25名と多く個人発表では質疑の時間がとれないことから、4名ないし5名の6グループで、1回2グループの発表とした。

高校2グループ、中学校4グループで、中学校については単元を指定し、希望をもとに教員がグループピングした。また、講義で学んだ事項から内容や方法に関するテーマをグループ内の話し合いで決定することとし、授業例をもとに検討・考察して発表することとした。レジュメに基づき発表し、司会進行も担当グループが行うこととした。印刷用レジュメのページ数、授業実践例を2例以上検討すること、引用した事例に関する情報、分析視点を明確にした学習内容や方法に関するテーマを付けること、コメントの記載、発表時間、司会進行を発表グループが行うこと、をプリントで指示した。

3. 授業後（最終回）のアンケートから

アンケートでは、8項目について、5段階評定（a：強くそう思う b：ややそう思う c：どちらとも言えない d：あまりそう思わない e：全くそう思わない）で回答を求めた。また、良かった点と改善すべき点を自由記述で求めた。回答数は受講生全員にあたる25名である。

<(1)から(8)について>

(1)「出席状況」は、aが23名、bが2名で、全体的に良好だった。

(2)「内容構成の明確さ」については、aが14名、bが7名でほぼ理解されていたがcが3名、dが1名おり明確に把握できなかった学生もいた。

(3)「講義と演習のバランス」については、aが14名、bが10名、cが1名で授業形態についての受け止めは良好だった。

(4)「演習への意欲的取り組み・準備」については、aが16名、bが7名、cが2名で、意欲的に取り組めたという学生が多かった。

(5)「グループでの協力」については、aが20名と最も多く、bが4名で協力についてはよくできたと回答している。しかし、dと回答した学生が1名おり、自身はaと回答しながらグループ活動の負担の偏りを指摘する回答がみられた。

(6)「他の発表からの学び」については、aが16名、bが7名でほとんどの学生が肯定的回答であ

ったが、cが2名みられた。

(7)「保育領域の指導に必要な学び」については、aが12名、bが10名、cが3名だった。

講義で保育学習の課題と本授業内容との関係について説明し確認テストを行っているが、用語や知識だけでなく、保育学習を整理する視点がきちんと定着するよう丁寧に行う必要がある。

(8)「今後の学習課題の発見」については、aが9名、bが11名、cが4名、dが1名だった。2回生を主な対象とする教育法Ⅱでは、意欲をもって学びたい課題の発見が特に重要だと考えられる。進路希望の異なるそれぞれの学生が今後の学習課題を見出せるよう支援する必要がある。

<自由記述から>

良かった点 (25名中24名が記述)

・講義では、初回で流れが把握できた。パワポの使用がわかりやすかった。

・指導方法の多様性が身についた。

・授業事例の比較検討により共通点・相違点、メリット・デメリットを考察する力が付いた。

・実践者の工夫や技術を知ることができた。

・「～の検討」のように視点を絞って考えられたので、理解しやすかった。

・集まりやすいメンバーでグループが構成されたので活動しやすかった。分担ができたので、負担感がそれほど大きくなかった。

・グループでいろいろな意見を聞くことができた。知識の幅だけでなく、考え方や捉え方の幅が広がった。

・主体的に取り組んで協力できた。調べ学習の選択の幅があったので自分たちで工夫ができた。

・他の発表も熱心に準備されていて討論にも真剣に参加できた。発表を聞き、グループで意見交換して多様な意見を聞くことができ、学びを深められた。

・指導案を改善することを考えたりできた。4回生も受講していたので、いろいろな視点を出してもらえてよかった。

・グループの発表、意見交換、先生の補足・まとめがあり、理解しやすかった。

・様々な事例が紹介されたので今後の実習で生かせると思う。将来に生かせると思う。

改善した方がよい点 (18名が記述)

・講義のスピードがはやくノートがうまくとれない。プリントがほしい。

・ロールプレイングはもっと授業を受けたかった。

・グループはもう少し少人数のほうが負担に差が出ない。

・最初のグループは、もっと発表までの準備期間がほしい。

・レジュメの作成法など、見本がほしかった。

・レジュメの枚数制限はないほうがわかりやすかった。

・事例の検討の際の視点について、もう少し説明がほしかった。発表内容の限定の範囲がどこまでOKなのかわかりにくかった。発表の方法についてももう少し説明がほしかった。

・初回は先生が事例を提示して議論を進められるとわかりやすかった。

・グループ間で似通ったテーマも出てきたので、制度についての学習など、ばらつきがあるとよかった。

・発表後の近くの人たちでの話し合いは、メンバーが固定されるので、席を指定した方がよい。

4. 考察及び今後の課題

本年度発表をグループ単位に変更した演習について考察する。教員としては個人発表に比べ取り上げる授業事例は少なくなるが、十分に検討された視点や全体での質疑の時間確保で、演習の質が保障できると考えた。また、グループ活動を通し他の視点に学び、発表に向けて協力して積極的な取り組みが促されると考えた。

アンケートより、演習に積極的に取り組み、自他の意見に学びながら多様な視点で授業事例を検討できたという肯定的な意見が大半を占めた。発表レジュメ、発表ともによく準備されていた。

教員としては、分析視点や発表の工夫を各グループが主体的に見出すことを重視したが、受講生にとっては雛型を示してもらえれば動きやすいという意見が多かった。この点は学生の自主性の重視と教員の支援のあり方にかかわる課題であると考え。一方で、教員への質問はあまりなく、先行するグループのレジュメの表記方法や発表方法をその後の発表グループが踏襲する面があった。また、初回グループの発表の際、単元にかかわる基本的な事項の説明がないなど教員には当然と考えていた点ができていることもあった。

以上の点をふまえ、次年度は教員がレジュメ等のモデルなど、どこまでを提示するかを再検討したい。その際グループごとの分析視点、レジュメのまとめ方や発表方法のオリジナリティの重要性という点についても、伝えていく必要がある。テーマを指定しない中での偏りについては、教員からの補足資料等で対応し、保育学習の広範なテーマをカバーしたいと考える。